

2026 年度入学式 (4/3) ・学長式辞

皆さん、ご入学おめでとうございます。

桜がキャンパスを春色に染め上げています。この佳き日に、滋賀県立大学並びに大学院の令和八年度入学式を挙行し、学部生六二八名、編入生九名、大学院生一三七名、計七七四名の新たな学生の皆さんを本学に迎えることができましたことを、心から嬉しく思います。三日月滋賀県知事をはじめとするご来賓の皆さま、そして本学の教職員とともに、皆さんの門出を心より祝福いたします。また、これまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆さまにも、深く敬意と感謝を申し上げます。

さて、大学とはどのような場所なのでしょうか。

私は、大学とは「問いを立てる力」を育てる場所であると考えています。

現代社会では、膨大な情報が瞬時に手に入り、生成 AI のような技術によって、答えを見つけること自体は以前よりも容易になりつつあります。しかし、私たちが直面している多くの課題には、あらかじめ正解が用意されているわけではありません。環境問題、地域社会の持続可能性、少子高齢化など、現代社会の重要な課題の多くは、「何を問うべきか」という問いそのものを考えるところから始まります。

だからこそ大学では、答えを覚えること以上に、「どのような問いを立てるのか」を学ぶことが大切になります。よい問いは、学びの方向を定め、思考を深め、行動を導きます。問いは、皆さんの学びや人生の進むべき方向を示す羅針盤のようなものです。道に迷ったとき、自分自身が立てた問いが、これから進むべき方向を指し示してくれるはずです。

授業や研究、友人や教員との議論、課外活動や地域での活動などを通じて、自分自身の問いを見つけ、その問いを深めていってください。その過程こそが、皆さんの大学生活を豊かなものにしてくれることでしょう。

そのような問いを見つけ、深めていくために、本学は多彩な学びの場を用意しています。本学は小規模ながら、一つのキャンパスに四学部十三学科、四研究科九専攻を擁する総合大学です。異なる分野の学生と出会い、対話を重ねる中で、新たな視点が生まれ、これまで思いもしなかった問いが生まれることもあります。

また、本学は少人数による実践的な学びにも力を入れています。フィールドワーク、実習、実験などを通じて、理論だけでなく、実践の中で学びを深めることができます。手や足を使い、五感で感じながら学ぶ経験は、皆さんの問いをさらに豊かなものにしてくれるに違いありません。

本学のモットーは「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」です。琵琶湖とその周囲の地域が学びの場であり、そこに暮らす人々こそが何よりの教科書であるという、本学の教育理念を表した言葉です。また本学は、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」大学であることを大切にしています。

こうした理念は、本学の教育のさまざまな場面で具体的な学びとして形になっています。その代表的な学びの一つが、「近江楽座」をはじめとする地域教育のプログラムです。学生が大学を飛び出し、地域の人々とともに活動する中で、教科書だけでは得られない多くの課題や学びに触れることとなります。

琵琶湖とその周りの地域社会には、環境、暮らし、歴史、産業など、さまざまな営みが重なり合っています。そこには、学びを深めるための問いが数多く潜んでいます。地域での経験を通じて、自分自身の問いを見つけ、その問いを育てていってほしいと思います。

大学での四年間、あるいは大学院での時間は、人生の中では決して長いものではありません。しかし、その時間の中で出会う問いや人との出会いは、皆さんの人生を長く導いてくれる羅針盤となるはずで

本学という学び舎において、皆さんが多くの問いと出会い、自らの進むべき道を見つけていかれることを心より期待し、私の式辞といたします。

令和八年四月三日

滋賀県立大学 学長 井手 慎司